

浪華之記行

頃は元治元甲子年極る月の末の廿日、浪華てふ都に旅立のいわひせんと筆を取ツて、おろかなる紀行を口すさみ、只後の旅路の一助にもと、寸志の功を残すものは松風軒の主し琴主

こたひ君公

大君の召におふせて、霜の月朔日に登營ありしに、斗からんや、浪華金城鎮護の命を請け給ひ、吉田の城主 **松平刑部大輔殿也** に打交りて守れよとの仰言にて 君は更なり。下として

もいつれも万歳を唱へ怡わぬはなかりけりし。亦附属せるやからには、いつれも新なる職事

を蒙り御供せる有かたさ、須弥山より高く蒼海よりも深く、拙等もこの内にたつさわりて、

まつた先用の命をうけ、彼の地に至りては悪さなせる人立の軽重を別ち闇照を別けてして

君に力を添うべしとあれば、元よりおろかものにして所置に惑ふ事多ければ、蒐せんかふせ

んとあんしいなまんとせしか、それも本意ならんと心付きて、事をなせる文を書写し、また我 君にこたひ心を添へ給ふは、宮津の城主 **松平伯耆守様也** は格老の内にして、いとねも

ころに事を傳へられ、拙等も彼方の待臣たちに教を受け末事成らせるに、吉田衆方早ふ登

坂せよとの来状にて、俄に支度取整へ 君を初め重臣たち、亦友とち等に暇を乞ひ、又合

部屋の朋友には暫時別れの酒造汲まんと、酒屋ニ向けし見當を少し廻して西廻宮ひるこぬや

うに夕方と言付やりて、荷の支度取、始末さへとゝのへて、待ツ間程なく、持たらせツ、搔

き集めたる海山の料理程にはあらねども、なまくさうを鮮らけき魚の皿盛りにて、先ツ杯を起

しツ、家内のうちも睦まじう汲終りしは亥中過、臥し戸をやをらおし建て、暫時まどろみ

眼を覚し卯時と起す。寅の時刻 餉支度の其内に再ひ起す。盃は又も別れの名残とて膳に

向へは梅干の浮塩咲きて見事さは是旅立の真事ならんと筆取ツて

年の内に春来にけりとおもふかな波の華にも梅か香そする
相部屋の人とに對して

楽しさや一と坂越へてあわす顔

魁かけて浪華に開けむめの華

とかくして支度もとゝのへは、馬被義と共にやりを持たらせ平井に音信、連立ちて、馬荷は跡に少し遅れ、残れるものに頼み置き 御屋敷を出立。六ツニ近し。数奇屋橋御門を通り、山下御門通り南鍋町より尾張町ニ出て、東西に向ひ品川通り、札の辻辺ニ而夜明ヶ切る。大木戸より高輪に懸ツて天気よろしく

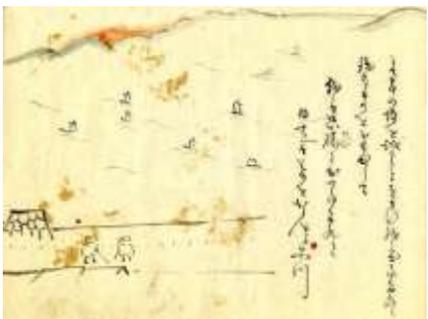
○高輪や旭の筋通る青海原

として、五ツ時より早ふ●品川駅に着。爰にて荷物改めのひまあれは来るを待ち、あたりの茶店に立寄りて一杯を催し朝風殊ニ寒ければ

汐風に吹かれて寒し●袖か浦 蛤鍋にぬくむ一杯

無レ程ゞ月改め出来して、馬の支度も調ふまゝ少しく先に牽かせ、我々は関門の改めあれば、印鑑を取出して引合せ、番所を過ぎて馬に打乗り、東の海●を詠めなからつくゝとかたるへみれば、はや此月も十日ニ過すして、明るとは夢にも知らねと心には知れて、何国の驛場にて年の坂を越るかともひ、我は心易けれと残るものをおも出して

我は只旅に心の易けれと内ては暮をなんと●品川



と少しく内の事杯おもひやりて、無レ程大森の駅ニ継ぎ、此處ニ而東海の名産海苔を調ふ。價若干一帖一朱也。

名物にちと乗込んで買ふたれば才布の口を銭か●大森

無レ程六郷涉しにぞ

馬よりはまた足腰もやすらひておもし○六くに渡し守かな

越へて直ニ川崎につき昼食事す。少し落付を得しまゝ
落付を得しは昨日に引かへて心持まで●川崎の驛



< 神奈川臺ヨリ横濱遠望之図 >

支度調、無^レ程生麦に出、此辺衢^{ちまた}ニ蛤の貝多く有し。

なまむきも濁らすよめはなまむきとよむはむき身もひさく故かと

と一句して、神無川に近き、右は山左には海、横濱開湊^{かふ}にして景色よろし。

日の本にとづくに人も^{戎異人}●神奈川と首^{くび}うなたれて頼む交易として、爰は馬上なからに打過き、無^レ程して程ヶ谷に近き

急きたるに程ヶ谷ありて、安[〜]とまだくたひれもせぬヲ着とはとして、馬を継かへ廿八丁を過さて境木といへるに着き、武蔵相模の境界と聞、此間中[〜]ニ遠し

鎌倉の御代納りし其^{のち}后はむ蔵の国か長く●境木

爰も馬にて乗過し、境木より廿三丁と聞て戸塚へ着く。爰ニ泊。



爰^{かしま}しう飯賣^{ふかうかめ}浮女^{ふな}か呼留^よて●戸塚^とまへては放^{はな}ちこそす^すれ此處に○一泊、初泊なれば珍らしく案着の祝酒を催し、夜分殊に冷へければ働^{はたら}のおふな炬燵^{かまど}して温^ぬませくれ蘇^{よか}生^かせし心持^{こころもち}そして寝む^ねけを催^{もよほ}し、床^{とこ}を延^のへさせま^とろみ、間^まなく起出^あして朝餉^{あさけ}も早^{はや}ふとうへり。出立の支度出来て宿りを出て少し行^いけは、戸塚の松並に草は有り。爰^{こゝ}にて不二^{ふじ}を初^はめて近^{ちか}く見る。

なれと半腹には雲を覆^{おひ}ひ、桮^{さかづ}は雪白^{せき}妙^たのよそほひ、是三国一と初^はて

雲晴れて旭^{あす}に照^あらす富士の根^ねは三国一の空^{そら}の白^{しろ}妙^た

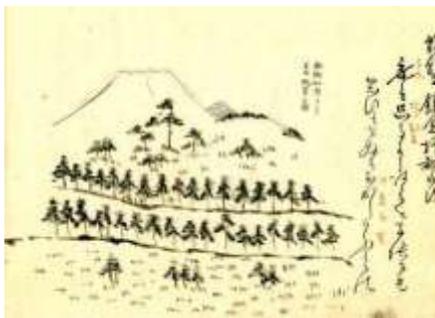
此臺、水無月な文月近し間、茶や懸りて賑ふよし、往来人に小女出^こて自然生^{しぜん}のほや^{いも}を賣^{ばい}ふ。價^いニツひらと言^いし。

天保^{てんぽう}二枚^{にまい}ワ言^いしか^か 銭^{ぜに}を言^いか^か 案内^{あんない}な案内^{あんない}か^か 夫^おたひらのおわしに妹^{いも}か直^しと行^いくは自然^{しぜん}に出来^いるやまの妹^{いも}かな

とたわれ言を吐て爰方廿三丁を過て影取といふ至り、馬の上にて寝むけを催しかけ取て聞く。
 氣安さや今年は旅の暮にして其●かけ取も傍示杭かな
 と氣安き旅を馬の上、廿八町ニして無レ程●藤澤ニ着く。右之方に遊行寺清浄光寺、寺中に
 小栗判官之墓所、續て照天姫十二の殿原立の石碑有り。宝物荒増に一覽なす。本堂の大造言
 しも更なり。

みちるしの有るなればこそ名も廣く日本国を遊行上人

此馬を下ツて町中に江の嶋弁財天の花表あり。参詣は帰路に譲る。朝早ふ通行して南郷の松



＜南郷松原ヨリ不二眺望之図＞

原に懸る。景宜敷、富士を右ニ見、往昔は刑場と言し。衢に子
 供等多く出てかきをあきのふ。

頼朝公鎌倉柳都の頃

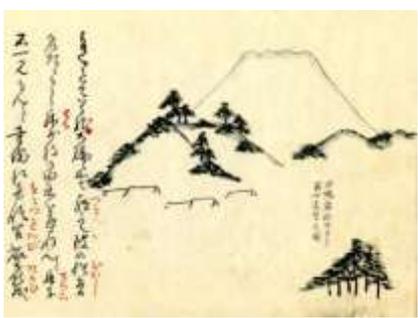
我は只馬にしあるを子供等は笑ひもせぬにおかしかふとは

見飽かぬに○南郷りの惜し富士の景

として馬上なからに爰を打過ぎ爰を過て●馬入川与いふ此渡し
 を涉りて、平塚の駅に近し。○昼食事を遣ひ

程もよし飯も茶もよし菜もよし●平塚なひか玉の疵かな

老入前百ト四十八匁にして支度も取廻、次なる宿大磯江急かん
 とせし。平塚の外れに田な歩あり。富士の景宜敷を見て



＜平塚宿出口ヨリ富士遠望之図＞

爰を過て無レ程●大磯ニ出て継かへ、彼の往昔名たゞりし虎少将

の由来を尋ねんと虎子石一見せんと、寺院に音俣開扉を頼。然るに僧出て由来を説く、

右之僧瘡毒ニて鼻拔些見苦し。如何敷体なり。右僧の曰、虎少将は虎子弁才天之化身にして、容顔美麗玉の如し与て、曾我十郎祐成通ひ給ひて契りを結び、なき后も虎少将尼と成るよし、いさゝか虎は、祐成の打死の後に尼と成りて所の翁を案内にて、井手の屋形祐成の最期の迹は爰かと斗いと、涙に沈みつゝ、

柄要

露とのみ消にし跡を来てみれば尾花か袖に秋風そ吹く

右の歌を吟して悟りしとなん。虎出生は相模国緒越の里にて生れたり。よりて乳名をお菟と唱し也。後に虎と改る。其故を尋るに、をとゞは異国楚之国の言葉にて虎の事也。又緒越の



<虎子石 弁天像>

里緒越の原共に相模の名所ニ而、和哥には諸越を唐山にかけてよめるも多し。人丸家集にあつま路のもろこしの里にをりてたつきぬをさからの衣と言ふらん是等の事あれば、浮女と讃とも中く凡人の及よとあらんとかんしつ、いわれを問ふに、僧敢て唱を不_レ為、只少将此石を籠卷せしよし、十郎五郎の矢疵あり、太刀疵ありと講しけれ共證としかたし。

右を一覧して十二臣の開扉料を祝して此寺を出、門前ニ虎子石と丸石ニ彫入たる有るなり。なててたしめに一句口すさむ。恋之言葉にて

曾我中に秘蔵にしたる虎子石肌なめらかに手さわりもよく

此宿内に花不見はし、けわひ坂も有り。寺外れ左り傍に幸福寺と言寺あり。西行法師鳴立澤の故跡ニて立寄り見れば、いと、淋しし秋の夕くれなとおもひやりて ○西行ノ杖且碑名等は略_レ之

(欄外) 西行は本名ヲ佐藤兵衛行清ト言し。北面ノ侍ニ而常ニ大内ニ殿居ありしか、風与二条ノ后を垣間見て恋慕之心発りいろ／＼と申入しか、先ニも武夫のこゝろ哀とや思召けん。今夜大内の外庇まで竊に忍び待べしと申送られければ、行清疆り無_レ之怡ひ暮るゝをまちて、差圖の所まで忍侍しか、后は更に来らず。餘り待侘て思わすまどろみしに后来り給ひて見しに、行清まどろみて有を見て○我ならば鳥の鳴にて待へきにおもわねはこそ君はまどろむ かくよみ給ひ帰らんとせし時行清目

を覺して○よひはまち夜中はうらみ嘯しは夢にやみんとしばしまとるむ　と返しければ、后も哥の心をかんして是より互に深き中となり(カ)、后より毎度哥よみ送れとも行清一向哥心知れず。行清おもひけるは、われ弓矢を取つては人の下に出すといへとも、今哥之道にて女に及はざるこそ残念とて髪をそり、名西行と改哥修行せしとなん

○黄昏はさそや鳴立ツ澤の跡落葉に水の滴なかれる　青好

爰を過て、吾妻の森宮といふあり。鎌倉御代ニは此邊、大分賑わしよし。七ツ半に近くして小田原ニ着く。當宿大久保侯の御城下往昔北条の古城、是は今の城郭ニ非らざるよし。○此泊万屋といふニ宿る。不事馴にして不都合而已也。飯蛸梅干等の名物を題して

すき腹に喰ふ塩辛の味もよくおふいり蛸とあたまてんく

入れ立ての煮花に添へし赤積を茶受け一とツ梅ほふしかな

此宿早ふ出立して、山さか下らんと支度取急き歩行となり、出懸ケにうゐるふの店八方のる梁作りを一見して

機能を世間に廣く○うゐるふと今に其名を　虎屋藤右衛門

僅にして此宿を出外れ、無^レ程山に懸りければ、名にし逢ふ礮礮第一なる管根にして、聞しに増(カ)る難所言ふも更也。大久保侯の御領且江川氏の御預り所ニして、小田原方二里にし湯本へ着く。此處轆轤細工等名物数多なり。爰に北条氏早雲入道の安置、早雲寺と言ふ寺あり。

いにしへの咄しも今に○早雲寺只時よりも時節なるらん

爰方追と坂に懸り、大阪ニツ三ツを越へて畑江出る。此處宿や数多あり。象煮餅をひさぐ。呼留る声かまひすし。

○箱寝なり文箱枕であるふのに客呼留てごうを煮るとは

なとたわれ言をはき出して、一杯の酒と丁子を替へていそかわしく爰を出、又山に懸りて

先かけて爰で度足も○箱根山其ねき事も叶ふなるへし

息を入れ、且氣を養ひかり臘月といふとも、身に汗して峠に登り、権現江參詣せんと道を急く。右之方ニ駒ヶ嶽といふ大山見やる。又八合メ程ニして甘酒やといふ銘物、小女出て年中商ふよし。此坂方向ひにはけ山有り。大石悉く落懸りて見へる。昔之北条合戦の節芭かり事ニ而石ニ突扣をかけしよし言々傳ふ。いかにもおきたる石にひとし。變替石といふ也。

夏冬の隔てもあらず此小屋にても美しくしき小女あま酒をうる

として峠に至り、権現江參詣せんと近道して、右江切れ無^レ程町江出る。家数仮成ニ有^レ之。

式之鳥居際に年歴たる大釜あり。三ツ有て古代のよし。爰を出て湖水脇に出る。道幅狭き

場所に俳諧歌の碑名あり。桃李園桃人与有^レ之。

逢事に鳥の空事いつわらは舌や抜かれん関の釘抜

爰を過て金剛王院前江出る。森とたる樹建石の松は笞を帯ひ、社頭の古ひし事、今に往昔をおもひ出しけり。

(欄外) 菅根両所権現は伊弉諾伊弉冉ノ應作也

坂下左りに曾我の社有り。又行者の堂あり。本殿に至り三拝九拝して御礼を仰け、無^レ程下山、斎の河原ニ出る。空海上人作物之地蔵尊数多有し。爰に石の花表有り。不二の景尤よし。

湖水の眺望又宜敷、水清くして魚住ますと言ふも此処なるへし。四里の峠を登りて一里に餘れる湖水有。是日本随一之関所なるへし。是を杉山を越して無^レ程宿に出る。本陣○石内

太郎左衛門与やらん。往昔々御出入なるよしニ而、迎し者兼而出し置御関所前ニ懸りて搔羽

織着用ニ而、主人代罷出て万事取斗吳是ニ頼ム。爰を過て石内ニ立寄休息、昼餉を出し酒魚

も出せし。また爰にて傾け、同家裏坐敷富士の景別によろしく、前ニ廣とたる湖水、向ふは

不二の高嶽ニして尽語に延へかたし。

湖にその影移す富士かねは是三国に一の風景 琴主

として爰を出立、主従六人○食事茶代ともに○忒百匁を置いて出立。馬荷は爰にて継替、又歩行となりて無_レ程西平に出る。此處不二の景宜敷、西行法師の山の上なる山は爰を言ふとあれは、

又山の上に不二見る管根かな 青好

此山禁に曾我五郎の乗たる石橋の馬蹄と言ふあり。線香等を上けて足の願叶ふと言し。左二いさゝか

尾花毛の駒も藐姑峯のすゝきかな はせを成べし よみ人しらす

朝鮮人之詩二

○獨立巍と白王蠻

中天積雪夏猶寒

五雲佳氣連金闕

雄鎮扶桑萬歲安

朝鮮張應斗



右等之富士の詩有り。実二三国一の風景なるへし。爰より三ツ谷且○山中といへるに着く。

此宿に山中熊藏爰二茶代一朱と言しものあり。大君御上落ありし時、敷石奉納せしよしにて、下り坂中

く礮礮なり。尤他力を頼まず一人の力にて無願にていたせしよしにて一旦は地頭より叱りを受けしよし。

石を敷気は山中に聞ゆれと褒美取気はとんとくま蔵

爰より手前山中にかぶと石といふあり。道中に有し。爰を下りて三嶋宿に近シ。三嶋の明神

江參詣。また地震后普請中にて近拝を許されす。●此宿梅木佐助ト言シやと言ふニ○泊す。夜前ニ引換へ

て殊之外ニよろしく。

そちこちと心を附けて取成せは昨日の穴を今日て●梅木や

爰を早ふニ打立、並松を過て無_レ程●沼津へ着き、水野出羽守殿御城下拝し、此城大手より僅ニして大海に近し。馬上なからに打過て●原に出ル。景色よろしく、此日より風吹出して、富士雲を覆ひ朝まの景無し与ていそくか爰に

大山祖の女木花開耶姫尊浅間とこへの俣によむは、信州の浅間と混ぜさる為なるべし。又伊勢にあさま山あり。うたにはあさへまとよめり。案するに朝熊も共に朝隈の義にして、字は借りたるのみ。むらさきの筑波と言ふも、山際の隈むらさき立たるを誉て言し。

摘要 富士の農男と言し弁

四五月の頃、富士の雪消へ残りたるか、宝永山の辺凹なる處に、人の形ちの如く雪の残る事あり。是を農男と名く。この残雪見ゆる年も有。また見へさる年もあり。田子の土人の日、

農男みゆる年はかならず五穀熟すと。又混こ陽漫録ニ載する處の富士の根かた、水田中に麦熟すと申し。是を水入麦といふ。是雪水菌となりて麦みのると申し。富士の眺望は、駿州有渡郡大野村府中より三龍飛寺の本堂より見るを第一とす。清見寺是ニ次く。原吉原の間又好景也。三嶋沼津より見れば、又大にひきて見ゆる。岩渚薩陀峠より見れば胸につかへるやうにて凄し。藐姑峯は齋の河原より一の平まで富士を右に見る景尤よろし。また朝毎に雲起りて傾きを覆ふ。土俗これを笠雲と言し。その雲西へ行く時は三日を出すして雨あり。東へ行く時は快晴すと申し。

馬上にては烈風は無レ殊ニ、難儀して一句一詠も出さずして、さかは松山ニ續て海原なり。右は富士足高山を見晴らし、晴天なれとも風故ニやんことなくやみぬ。此邊ニはせをの碑あり。馬上なからに

○少しつゝ時ニ残して富士の雪 はせを

原の宿にて馬継替へ、江川俟御支配所ナリ。富士絶景なれば、

とふ見ても形か面白し不二の山

爰を過て吉原ニ繼ぐ。一里半と聞く。

出足らめか
てたらのめの句は○吉原をおもへとも景色よさに止められもせし

又氣を興して紀行しツ、早くも●藤川ニ着きて、川邊を詠めやるに急流ニして凄こし。石は角洒れて丸く成り、実ニ船越しは氣味悪しき渡し也。此川上信州方落下と言し。又富士大石寺と言し寺川上ニ有りて、此處方川海苔を出す。絶品也。禁賣買芝川海苔ト言し。少し雪解水ニ而水にこりければ

ひ
一と二夕日ぬく温みに富士の雪解けて空に知られぬ水増りま希理けり

向の岸を岩渚と言し。

○不二川も首尾能く船て此岸に岩渚ならぬ洲か渚に着く

○岩渚は船に迸ふるものなれば南無阿弥陀仏口て栗の粉

(欄外) 栗は西木ト書テ行基モ一生杖ニ突レシト云々

此岩渚の名物栗の粉餅ノ名物有り口す。西ノ木と書て西方浄土に便あれば、少しく心を用ひて爰に讀入れ、此茶店甲州の雨端硯多く出ル。拙も一硯ヲ求。爰を出、無い程三軒茶屋と言しあり。今は数軒に及へり。前の田子の浦、後ろは富士の根かたにして、往昔者人の古事なとおもひ出して

富士影の浦に呼子坎田子の海

白妙のふしか根青ふよこせしとしきりに洗ふ田子の浦波

忘れては波にも雪の積るかと晴れて影見る田子の海面

是より●江尻迄の濱辺を●田子の浦と言ふ。蒲原を早ふ出立してまたくらきに通ル。大方町続き也。尤塩はまにて、あわひさゝひの名物なり。波音など高く明り六ッ前に過候。宿は●

羽田や万右衛門ト言しに泊り、由井ニ向て仮成と言し

よき妹か来たるあわひとまちかねて○由井立髪をかき付て待ッ

などして一笑し、一杯を愈し三人して程よく呑也。はやくも草臥の出て来て何事も打忘れて

一ト寝入し、此宿海際ニて山上を○さつた峠親知らず子知らずと言ふ難所もあればとおもひに近頃は親も

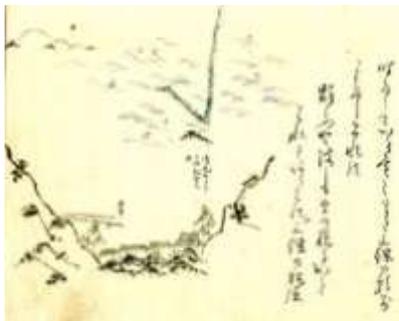
知り子も知りとなれる歌

大樹公御上洛ありし。其后は海邊を通行故、人馬共に爰に通に、此所より塩焼洲河あり。向ひをみれば三保の松原海中にみへ、渡るに當つて不二山見ゆる。此日風ありて雲靈空に出る。

時雨るゝや傾き覆ふふしの雲落葉に水の別かぬ小ななかれ

倉沢行くもあわびの片おもひさゝひの亮に灯はともすとも

右手前に僅小村あり。●倉澤といふあわびさゝひの銘物也。爰は朝故空しく打過ぎ、無レ程して●興津ニ出る。爰ニて馬を継ぐ。其内清見寺江詣て聞し眺望、庭前に這梅有り。爰ニて一詠



<清見寺ヨリ三保眺望之図>

海を吹く風の便りに気をもみて梅か姿を松に隠すか

右之梅這ひたる所十七間といゝ、往昔は○清見か関と言ゝありしよし、家道永應院と言し。

鞍壺に寝ツ起ツして詠むれば波より低く○三保の松原向ひは三保、左りに當りて富士の景色見ゆ。此日風ははけし。少しく時雨していと寒く、また三保の影別ニよろしければ

疑ふや波にも雪の積るかとはれてあらわに○三保の松原

此清見寺坂下より馬ニ乗り、次の江尻りへといそく。一りと

二町故無レ間●江尻江着き、此所は馬少くして車ニて荷を運び、人は駕籠ニて継立る。此處に

川有。橋をちこはしと言し。此橋は三保江行く、よき風景也。また久能山への道もあり。爰

を過て中ノ郷また○小吉田といふて間の宿に銘物の酢し有て桶ツゝに積る賣る。一と桶三十

式坎。

一桶はすもしなれとも是ま傳と茶にして我は○足る事と知る

爰よりは又歩行となり道宜敷、此邊に權躅の名所アリ。またあしくほの茶出る。無レ程●府

中に出る。此處々日改めなればなれば、脇●本陣望月清右衛門(マヤ)といふにて暫時休息なし、○
昼食事髪月代等いたし●御城拝見大手先方御堀廻り一覽致す。名にしおふ今川公築かせ給ひし郭にて言しも更なり。拜見相濟而本町方阿部川へ之近道ニ懸り、荷物は槍持に打任せて、無レ程川端に出る。此處ニ而川札を出す。肩車にて渡す。荷物は連臺にて越す。當城は聞處田中城主本多伯耆守殿守らせ給ひしよし。月二十五日定の交替なるよし。川岸に出て見れば、
兩脇に名物○あへ川餅をあきのふ。形牡丹餅ほたんもちの如し、あつきのあんを附る。

乗ツたらは首持ちくびもちあけてへツたりと○あんころんあゝかたらほんにたまらすと

先ツく無事に爰を打越し、直に丸子宿に着き、とろく名物はたべつして只見しのみ

摺鉢の中をやたらに小すり小木ぬらりくとする摺るとろく汁

爰を通り過して無レ間○宇都谷峠に近し。此禁に○御羽織やと言しあり。太閤秀吉公 神君様其他將軍家方御羽折を拝領して今に所持なし。且馬の屈まのくを半足ツ、御城代江献上古例のよし。是方少しツ、坂となり、坂上に自然生寒水富士の雪酒を賣る。また十団子とて小サき団子を糸に通し漸つたに釣してあきのふ。是をかふて峠の觀音に献すといふ。

手遊びの珠数たまごひかずよう似た白玉しらたまはなんしやと馬士に○問ふ団子たまご哉

爰より●宇都谷峠に登り、殊ニ礮砦けんそなる事言しも更なり。半腹はんぷくに過すして馬より下り歩行となる。此邊裏白沢山に生茂り見事なり。宇都山越へとて往昔業平朝臣東都なりのひらちやせんあつちに下らせ給ひし時
葛生茂り御歩行悪し、けに御杖ごつゑにて切らせ給ひしよし。今日葛切れくいまに繭出ると言し。

心にはやたけにそれとはやれとも高きに胸を○宇都の山越

たとるく葛の細道踏かみわけてうつゝに歩行山越への旅

右の山を下りて無レ程●岡部に着く。

はや年の終りに近き旅なれば問やか(カ)馬子に手を●岡部宿おか

爰を継かせ宿を出、姿並左の方に駿州田中の城有り。道方左り日暮候におよんで●藤枝に継く。爰に●一泊。此處に連歌師巢光ついでの旧地アリ。竹の花活いけ其他寄物を出す。また此宿にから

し堂ほとゝきすと申し与て

冬でさへうつかり口ニ入たらば盲目めしいても泣く○ほとゝきす哉

爰をは早ふ出立して無_レ程瀬戸に着く。染飯そめいの銘物を商ふ。

ゆツたりと腰打こしうち付けて御茶うけにたべたけれども道を○赤飯あかか

爰方三軒家村といふ有り。爰を過て大井川に近し。●搗田宿に着て、従_レ是は肩車と聞き気味悪くおもひ、先ツ一杯を汲て気を付けん茶店に立寄り、無_レ間汲修りて爰を出、●大井の神社を拝し無事を願ふ。肩車に乗り

一杯の酒に心も○大井川其川越も無事てめてたく

右川水丈はさ程ニあらねと、急流ニして人足の苦労おもひやるべし。此川を涉りて無_レ程●金谷に越す。僅にして山に懸り金谷坂と言し。大井川は駿州遠州の境也。坂上を不二見臺と言しアリ。下に大井川を見渡し、向ひに不二を見る。

見渡せは晴れて心も○大井川原に叶ふかに不二を見越して

爰に茶店アリ。不二見茶屋と言し。大坂余程有_レ之。右を下りて●菊川と言し宿アリ。いと淋しき谷間のやうに見ゆる。僅なれば此宿を過ぎ、無_レ程菊川峠に懸り、爰を佐与の中山そたてかんをんと言し。長き峠にていと飽果あきけもし。峠に子育そたてかんをんて觀世音あり。脇に夜鳴松あり。峠に茶店あり。これにて飴を商ふ。飴の餅家毎いさくにひさく。

○そよと吹風も淋しき松の聲

として爰を打過うちたき、衢みちに夜鳴の石といふアリ。其丸き中程

に南無阿弥陀仏と彫入あまはたり。

西行上人

としを経てまた越へきとおもひきやいのち也けり小夜の中山

うたの命は身命のいのち発句のいのちは時の間のいのち

いのちなりさよの中山にてあわん はせを

又越ん佐夜の中山にてあわんわか松急 はせを



<無間山小夜ノ中山ヨリ眺望ノ図> <小夜ノ中山家毎ニ飴ノ餅ヲ賣ル>

是空海上人の筆跡と言し

小夜更けて人音まれに成る時はいしももの言し○中やまの驛坂
あわれさを夜なく聞やまつのこゑ

として爰より下り、向ひに見渡ス山は○無間山と言し。謂は長ければ略レ之。夜鳴石化鳥刃きんば
の雉子孕婦男子音人親のあた討の事は此處の商本しょうほんに譲ゆづりて爰に略せる也。

沈しづみみても其名は朽す釣鐘つりかねの今井けいの底そこにありと答へん

爰を下りて●日坂に出る。爰にて昼食事を調ふ。蕨餅わづひもちの名物あり。茶店食事の給仕に、また
二人に至らざる兄弟の美人アリ。妹は姉に増り、顔色小町嬉き批ひの再来かとあやしまれけり。
いづれも眼を傾けけりて

なるへくは夕餉ゆふくわも爰こゝて一泊り妹いもに手足をさわらびの餅もち

たわ言を残して馬を継かせ、次なる●掛川へといそぐ。昼後に過行道をいそぐまゝ、家毎に
葛布くさふを商あきなへとも老おいにりもせて、馬を継かへし而巳にて、●原川といふを早ふ打越さんと一句
○原川を越へて今宵は○袋井と馬には鞭を打て○掛川

として急しまゝ日暮るゝにおよんで●袋井へ着く。●株かやといふに一泊。此夜酒を慎しむ。
早とまどろみてまた明けぬに見付へ付き、此処富士の見納のなりよし。又上方より来りし者
は爰にて初て不二を見初める言し与て、言葉を仮りて

一と夜さに出たとはあまり迎山むかやまな是はほんまな●御富士様かと

として馬を継く。爰に富士見臺といふありと言し。所のもの物語りせし也。また加茂川橋と
言し有り。爰方●池田宿を外して天龍への近道有り。是は往昔神祖御通行の場所故、今に往
来を咎めず。天龍は○大天龍○小天龍と言し二瀬有るよし。二夕瀬共に涉しして渡る。

水上は空にも近き○天龍の登り下りの船のするとき
として川方上り、川端を抜けて無レ程松原に出、濱松江の往還也。並松の結構は言しも更な
り。東海道一之松並と言し。長き道を通り過て●濱松城下江出る。町並殊ニ賑わひけらし。
町半に○五社明神の社有り。爰方右者大手御門ニ而名にしおふ名城なましろにて、今もおもひやられ
けらし。今○井上侯御城主ごうごうにて六万石也。此處ニ而昼食事をととのへ●篠原と言し間の宿あり。
遠きやうに覚ゆ。漸にして●舞坂まひざかに出る。爰にて○船渡しふねわたしに懸る故、少しく手間取有あ之よし

ニて、暫時御出入之旁江立寄、支度之間待合せし也与て、銘物之のりニて一杯を催し、茶代式朱遣ス。



<今切之御関所図>

新磯を乗り越へんとて一杯の酒に心も○舞坂の駅
とかふする息ニ支度出来、荷物積ませ主従六人乗組して
新居ノ渡舞坂ヨリ一里今切トモ云し

今切之御関所 遥ナレトモ見通故カ此処ニ而立ナから小便ヲ製禁ス

一里の渡しをまどろむ間に越へて、御関所前に着すれば、●
新井の宿御出入のよしニて○中山屋孫次郎といふもの来り。御
関所方之手形等持参、案内よろしき旨ニ而通行、右中山屋ニ
て酒肴出し、挨拶等見斗、一朱遣文道を急きて国須賀江いそく。此所
之御関所、松平刑部大輔殿七万石也。
船中ニての詠

新磯にくたくる波や冬の海船縁到る風の間にく
此宿をいそきて無_レ程山に懸り、余程の山有り。此山中に一
軒の茶屋あり。是を汐見峠といふ。絶景なり。

茶屋有て暫時休らひて

遠波の真白に高し汐見坂

水や空寒に流るゝ帆の影を霞の中に見る○汐見坂

空低う見るや長閑な海の果



<汐見峠ヨリ遠州灘眺望之図>

日暮しに近ければ、急きて山を下りければ、●国須賀驛●岡田やと言しに一泊し、爰を早ふ
出立して次なるニ夕川に移る。此ニ夕川といふ方吉田迄の間、夕さりに當りて、山中に巖の

観音といふアリ。往昔池田殿先祖、国須賀驛江御宿陣ありりし折節、御夢に今宵は大難生る

故、供廻り早く引上ケ有哉ニと御造あり与て、何事やらんと人数取纏メ山上ニ引上りけれ
は、無_レ程津波大山の如くに上り来り。国須賀驛一時に波ニ洩かれし由、然ルに池田家御人
数老人として難なく、是観音の教え給ひし故也とて、即時に使者を立られしに、巖の内に壱
寸八分の観音御座ましければ、直に拝礼ありて爰に祭り、今に巖の観世音といふ。又山
上に一丈有餘の観音を立せ給ひ、御前立として、遠州灘を守らせ給ふよふなさしめ給ふとな
ん聞ぬ。元は国須賀驛にありしよし、其此に新居の関所山抜して今切と言し名の残りしよし。
無_レ程吉田城下に近き町並、殊の外ニ宜敷由申傳となん。七万石●松平刑部大輔殿へ向ツて

右之方に御城有^レ之。右町を馬にて乗越へ、町外れニ豊橋といふ大橋有り。三州一の大橋なり。長サ百廿間有ると言し。爰方勢州白子江之船出し。此邊近郊の老若男女共に伊勢參宮、春先殊ニ賑わしきよし。また娶り前の者は參宮して神を引合せを願ふといふ。

伊勢へ行くとのねへさんも色○白子器量○吉田と人に○豊川^間

として、爰を打過き●稻おといふに一里半よと聞く。いと淋しくやうやうにして、爰よりまた一里廿四丁を過て●赤坂といふに着き、馬を継かせ宿ノ中邊也。

旅の連兄弟^{はらかい}よりも氣安と互に心○赤阪^{あかたか}の驛

として次なる宿江●法藏寺と言し。神君御手跡御学文ありし御寺にて御朱印地、且御羽織御机御文庫等も今にあるよし咄しに承る。爰にて法藏寺取繩とて、名物を賣る。其謂神祖御幼童たりし時、徒被^レ遊、朋友しはり奉りしは、御運開かれ給ひて御あやかりたしとて、今に家毎に賣る。

其縫^{ぬい}のあるなれば身も○法藏寺年経ぬれとも繩^{なわ}朽もせし

右法藏寺を過て右に當り、神君御伯母子様御旧跡、今に連めんたり。また少しく行く。左りに、三州山中御宮と言し有り。神君門徒与御合戦之折柄、御身隠れの山故、御難所岩屋穴アリ。爰より山鳩舞上りし故、御無難に御遁れ遊はされし故、神骸を舞上り八幡宮と言し。御陣所跡、御手植の檜且御手植の竹等今に有し。岡崎方之近道あり。また左りに吉良道とあるは、同州西尾松平主水正殿城下へ之道ナリ。五里と言し。直くに行きて岡崎城下江近

し。●本多美濃守殿城下ニ而城至て見事、櫓数数多見ゆ。町並も能く日暮ニ近くして●三ツ漏^ぞやといふに泊る。一杯を催して少しく面白うならんとせし時、飯盛の全盛両三輩来ッて頻りに伽を進メけれども、受け引かねは、雇人して頻りに進メ与てよき程に姦りちらして臥りにければ一句

なふり見る其口先は●みツ漏^みや三筋^{さん}てころふ岡崎の女郎

なふられる事とも知らて飯盛はこれ○岡崎の宵女郎衆かな

など戯れ事して打臥、早ふ爰を立つて●矢作^やニ懸る。今は涉しニて渡る。橋は右に見る。今僅に残りける坎。是日本の一なるべし。彼の太閤また幼名かりし時、蜂須加ニ出會ありし古事などおもひ出し

あな取ッて道連にせし夜働き子供にはぢを○蜂須賀^{蜂須賀古六の古事}のぢ

爰を過て無^レ程大濱といふに着き、間の宿にしていと淋しく●知立^{チリウ}辺の道をいそぐ。此宿に



<今川上総介義元討死塚図>



<尾州桶狭間之図>

はまた●池鯉鮒大明神と言しありて、口はみむしの災難を免れし神有り。依而参拝、爰ニて昼の食事をとゝのへ、右の手前に業平手作の観音有り。爰に●往昔八ツ橋有りと言し。今は名のみ也。

そのからのゆかりや筆てかきつばた

池鯉鮒は遠慮して、蛤鍋ニて昼の支度しければ

名にめてゝ○池鯉鮒は少し五まむしはさう与て蛤鍋ひるひて昼餉
とうへる

三州尾州の境なる。少し道を急いそきしに、越前敦賀ツルガより戻り
の歩兵大勢に出合。道幅狭ければ

常ならば直と行へき道なるに歩兵に道を○前後する
とは

として前後といふを過ぎ、先なる●桶狭間桶狭間焼ノ瀬戸有之江立寄らん
といそきし所、無レ程してそこに出、右なる田中に義元公、
左りの平原ニは諸士討死の墓所とに有レ之、いと淋しく物
あわれ也。

其他登、高原の碑文あれとも誰も知る處、また事長ければ
略レ之。元治元年十二月廿八日爰ニ参詣、有様をおもひ出
して

ほろりする涙を継くや矢建墨 青好
右ニ當りて松一木あり。是義元公鎧懸の松と言し。今に駒
寄せの掛りて有り。又た

桶狹弔古碑
 登高原，眇遠慨歎興敗于前跡，何國蔑有餘獨悲此桶狹云記曰永祿三年駿俟西征五月十九日陣桶狹山北織田公以奇兵襲之駿俟義元滅夫駿強國也方其畱霸相甲請以賦從尾人亦往往送款於是大舉入尾攻鷲津丸根拔之曰明且屠清洲而朝食衆皆賀置酒軍中會黑色

起西北風雨暴發敵人鼓聲亦從背震皆不意其猝至中軍大亂格鬪死者二千五百餘人夫自足利氏失鹿四海戰場周以修亡甲以暴滅而未有若此一戰而跌者也勝敗如化誰知其極但勝之不可保矧可驕哉悲也夫雖然或聞軍敗自先鋒還鬪與其乎二百人皆死或守孤城不走請主尸而歸若斯類者

桶狹弔古碑

登リテニ高原ニ一眇ミレ遠キヲ 慨歎レハ興一敗ヲ于前跡ニ何國ニカ蔑ナカレレ有餘獨悲ム事ニ此ノ桶狹ヲ一云記ニ曰永祿三年駿俟西征シ五月十九日陣桶狹ノ山北織田公以奇兵襲レ之駿俟義元滅ヒメ夫駿強國也方リテ其畱霸相甲請ヒニ以賦從尾人亦往往生送リテレ款拾レ是 大舉入リレ尾ニ攻鷲津丸根拔ク之ヲ曰明且屠ニ清洲ヲ一而朝食セント 衆皆賀シ置酒ス軍中ニ會一黑色

起ク西北ニ一風雨暴發シ敵人鼓聲亦從レ背震フ皆不レ意ハ其猝至ルヲ中軍大亂格鬪死者二千五百餘人夫自リ足利氏ノ失ヒシ一鹿四海戰場トナリ周ハ以修亡甲以暴滅ヒヌ而未有下若此ノ一戰メ而跌シカ者上レ也勝敗ハ如化誰カ知其極ヲ但勝ハ之不可保矧ヤ可驕ヤ哉悲イ也カ夫雖然或聞テ軍敗ルト自先鋒還リ鬪ツテ與其乎二百人一皆死或守リテ孤城不走請主尸ヲ而歸リヌ若斯類ノ一者

累世所養、豈不皆忠烈、我
籍使後人有庸主之村、外
結強援、內用若士、師徒雖
虧、駿遠之地、尚全猶足以
向西報伐也、游蕩忌讐、卒
以播遷、悠悠蒼天、此何人
哉、今生平世、眇歎前跡、已
歷二百五十年、時雖邈、事
猶昨、則後人吊之、亦於今
也、則是千萬世、亦何有極、
請建碑以記之、銘曰
三軍覆野茫茫、孰有

後孰孤傷、亂之思治
已值今時、建行碑、酌
古邱、來吊之、千萬秋
治不忌亂、視舊跡碑
文化已夏五月、尾張儒宦

秦鼎撰

大坂天満邸

中西融書

碑陰記

此碑也、豐長輩有所感而建
之、碑文所載先鋒、還闘在、他
人猶且扼腕、況於豐長輩

累世所養、ヒシ、豈不皆忠烈、カ、ナラ、哉
籍、使、後、人、有、テ、庸、主、之、村、一、外
結、強、ヒ、援、ヲ、内、用、若、カ、ク、ノ、事、キ、士、ヲ、師、徒、雖
虧、ケ、タ、リ、ト、駿、遠、之、地、尚、全、猶、足、以
向、テ、西、報、伐、ス、ル、ニ、也、游、蕩、メ、忌、讐、ヲ、卒、ニ
以、播、遷、セ、ク、悠、々、蒼、天、此、レ、何、カ、ナル、人
哉、今、生、平、世、眇、歎、ス、レ、ハ、前、跡、已
歴、タ、リ、二、百、五、十、年、ヲ、時、雖、邈、ナ、リ、ト、事、ハ
猶、昨、則、後、人、吊、フ、モ、万、レ、亦、猶、レ、今
也、キ、サ、ハ、則、是、千、萬、世、亦、何、有、極、リ
請、建、碑、以、記、サ、ン、レ、之、銘、曰
三、軍、覆、野、茫、茫、孰、有

後 孰カ孤傷スル 亂之思治
已值ヒヌニ今時一 建テ二片碑ヲ 酌
古邱一 來吊ヘレ之 千萬秋
治不レ忌亂 視舊跡碑
文化已夏五月 尾張儒宦

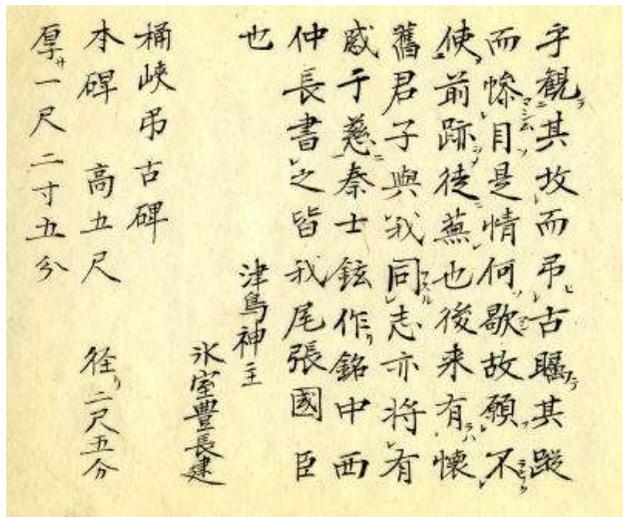
秦鼎撰

大坂天満邸

中西融書

碑陰記

此碑ヤ也、豐、長、カ、輩、有、ラ、レ、所、感、ス、ル、而、建
之、碑、文、所、載、先、鋒、ヨ、リ、還、リ、闘、フ、ト、ハ、在、テ、モ、二、他
人、猶、且、扼、腕、ス、況、ム、ヤ、於、ヤ、二、豐、長、輩、ニ、



乎觀^テ其^レ故^レ而^レ弔^レ古^レ矚^テ其^レ蹤^ヲ
 而^レ慘^{マシム}目^レ是^レ情^レ何^ソ歌^{マシ}故^願不^{ラン}事^ラ
 使^メ前^跡徒^ニ蕪^也後^来有^ラ懷^ノ
 舊^君子^ニ與^レ我^同志^亦將^レ有^也
 感^于慈^ニ秦^士鉉^作銘^中西^也
 仲^長書^之皆^我尾^張國^臣
 也
 津島神主
 氷室豊長建

乎觀^テ其^レ故^レ而^レ弔^レ古^レ矚^テ其^レ蹤^ヲ
 而^レ慘^{マシム}目^レ是^レ情^レ何^ソ歌^{マシ}故^願不^{ラン}事^ラ
 使^メ前^跡徒^ニ蕪^也後^来有^ラ懷^ノ
 舊^君子^ニ與^レ我^同志^亦將^レ有^也
 感^于慈^ニ秦^士鉉^作銘^中西^也
 仲^長書^之皆^我尾^張國^臣
 也
 津島神主
 氷室豊長建

斯くの碑有て、平原には義元公を初め奉り、諸勇士等討死の墓処アリ。右碑文を以て知るへし。又此少しく先に至りて●有松村と言し有り。何れも今川の落人のよし。世に鳴海絞と言し是也。

今川の流の末^も有松に君を待たてしほりするかな

向のよき絞りがたんと有まつと登り下りの人にかわせる

爰を過て無^レ程鳴海に近し。今宵は宮泊りといそき、漸にして宮に至り泊らんとせしか、折節●松前豆州侯京都方御下向ニて、同宿殊の外に混しければ、一軒として宿するへふもあらし。
 (欄外) 宮人の懸たる畏にかゝる人は浮世くるひに踏まよふなりと

依而●無^二餘義^一問屋へ申請して、馬を出させて荷物を付替、佐谷へ廻らんと、供揃わすれば連立、●馬被義之槍持、爰ニ失たり与て、そこちと尋ねけれども更ニ別らす。せんすへなくおもひて打遣(カ)り、同所方尾州街道ニ懸り

(欄外) 熱田神社ハ祭神五坐第一天照大神第二素盞鳴尊第三日本武尊第四宮實姫命第五建稻種命神躰草薙宝劔ト云々

●熱田宮居を右に見て、此邊の茶店に立寄り一杯を催して、このしろの魚田楽としやれて、茶碗酒に気を付け、爰を打立、凡半道程も来りし頃、左りに切れ佐谷海道、松原と成り、其處方右ニは伊吹山、向ひには北陸道の山と、いつれも雪降積りて寒きこと言斗りなし。また夕陽にむかつて名古屋城の鯨鋒輝き渡り、いと見事なれば

落る日に登るひかりや鯨の鯨(カ) 青好

としていそげとく中とに、道遠くしてやるせなく、式里にして漸く●岩塚と言しに着き、

爰に宿らんとせしか、差支し由ニ而餘儀なく川を越へ、●万場マンバと言しに着き、●桔梗やと言しにて●一泊を乞ふ。見懸はよりてよき宿、しかし伊勢參宮の頃ならては、多分に宿借ものもなかりし由物語る。是も旅の一つ咄しならんと、一杯を催し猪肉をもふけ、温みを入れ、一と寝入す。

○万場マンバさんかそちこち世話をするなれととんだ難儀に大晦日かな

これも長途事なれば、是非ニ及はず。爰よりは荷物を車に附ケ人共に打乗りて、佐谷へ越る途中、●神守と言し宿有り。爰ニ尾張●津嶋牛頭天王日本最初の宮居アリ。是は衢より拝礼して通り行き●佐屋江着き、今日は大晦日なるに、斯く安くと車坂にて、年の越るも旅にしあればこそと、我身を祝して

人は皆越るにあしき年の坂を気安く我は御車で越す

●伏見やと言しにて、●昼食事支度せし處、御出入のよしニ而、酒肴出レ之与て為二挨拶一と○金百疋為レ取候處、殊之外為二果配音義一且渡舟場近し。世話等厚致し呉、尤此宿は尾州侯御領にして船場近し。運生賃之由、往昔方仕来りのよし申聞、且名物大根を三人江為二土産一到来与て

○伏見やな暮る土産は甲子の是こそ年の○尾張大根

として暫時砂河原を歩行、此邊砂白き事雪の如くいと見事、木の根半ほとは砂ニうつみ有し。木曾川の末と言し。爰を船にて乗り越へ、八ツを過るに●桑名宿へ着き、京屋小兵衛ニなん宿る。海際に伊勢太神宮の花表あり。爰より上る。十万石松平越中守殿御城下ニ而、町並いと見事なり与者大江戸に近し。大晦日なれば、やく払ひ等衢に多し与て為レ払二一笑一、又泊屋の取なし昨日に替りて丁寧なり与て

昨日にはまた引かへて今日こそは都合よきめに大晦日かな

年の終りに斯くよき事のあれば、翌年もまた能からんと臥戸に入り、酒肴など取寄せ小魚あじ小はだ等の小魚、いと見事の料理、また道引をよびて、揉ませながらに白波と共に、枕を付ケて年を明にし与見れば、はや快晴にて、元治二乙丑年と代る。初に斯く天氣の能きも芽出度ければ、

はつ東風に今年の顔を吹かせけり

唯向くも東の方や旭の恵み

是より爰を立ては●小向ひと言しに行ケば

明るかとおもへは馬に乗初めの都の方に最早小迎ひ

爰にて家礼のよしにて、屠蘇象煮餅を出し、殊の外之馳走に逢ひ、またきに大に過し芽出度、爰を旅立に小向ひを過ぎて、●富田と言しに着き、爰は名にしおう蛤の名物、松の蓋を以て

焼き皿に載せて出し、人呼て桑名の焼蛤と言しは是也。立寄りて一杯を命し賞翫ス。

まつかさまつかさに温められたる蛤は水沢山みづさわで○富田とみだよい味ち

一と皿價百匁ひゃくまゑと言し、早き故打立ちて次宿●四日市よひいちと言うに向ふ。爰に至りて昼の食事を支度しどに、家号●太田ただやと言に付つけて飯盛いひもりと題して、

外目か岡眼おかまから見たれはとんだ二ツ山抱子にすくの顔かほに太田山ただ出でし

なとたわれ言いとして、食事を仕舞追分しむいてふにて、天照あまてらすらすおほん神の御花表みはなうらを不斗ふと拝ひし、参宮まみやせし心持こころもちとして

元日もとひや斗とらす伊勢いせの花表はなうら先

拝伏ひやくふくは丁度ちやうど恵方けいほうや伊勢いせの神

(欄外) はせを いせに詣て、何の木の花とはしらす匂におひを

西行上人さいぎやうの哥うたに 何事なにことのおわしますかはしらねともかたしけなさに涙なみだこぼるゝ

はせを 四日市よひいちより馬うまニ乗りて杖突坂つゑつたか引き上るに荷打返にがひかへして馬うまより落

○歩行あゆみならば杖突坂つゑつたかを落馬おちうま哉

名所などころなれば二段切にだんぎニても論ろんなしとかや

烏丸光廣うす丸ひかるひろ卿きやうの紀行きぎやうニ 草臥くさぶたて歩行あゆみより通る旅人りょじんはみな杖突つゑつたかの里さととこそ見れ

爰こゝを立ちて無な程ほど●石薬師いせやくしと言しいに着いき馬うまを継つぎ、恐おそなから馬うま上うへなから

尊みこととさや都みやこに近ちかき此里こゝは石も薬師やくしに替かる芽出めたさ

(欄外) ○此石薬師いせやくしの東ひがしなる此坂こゝニ杖突つゑつたかノ名なアる事ハ日本武尊やまと醒さケ井いノ御足みそとヲ三重縣みへ曳ひます時とき佩ひなくる所ところの御鍛みかヲをときはしめて杖つゑニ突給つふより三千年さんせんねんの今迄いまも呼事よびごと也なりト言いし

爰こゝをいそきて次つぎなる●庄野しやのの驛えきにいそくに一里いちり也。此邊こゝ牛うし多くしてさもいかめしき出立いだし也。七ツ過ななつる頃ときに着いすれば、爰こゝに留とどめんと問屋もんやのもの懸入かへりけれども、我われは先まへ超こへんとおもふ心こゝろあれば、とう／＼馬うまをかさせ

とう○庄野しやのかふ庄野しやのとはしたれとも今宵けふは馬うま之の登のぼる○亀かめやま

として、日ひくるゝに及およんで、●亀山かめニ着いく。六万石むなんしやく石川保之助いしかわのりすけ殿のりすけカ城下じやうげ也。地邊ぢへん高たかき處ところニ

ていとよろし。●伊勢いせやと言いに着いく。元日もとひの事ことニして屠蘇とそ等ら出い出してなに与あて祝いわして曰いふ

蓬菜ほうさいなれば

蓬菜ほうさいに臥ふすのも旅りょの恵めぐみみカかかな

○亀山かめに臥ふすや斗とらぬ花はなの旅明りよめくれは早く霞かすみさわたる

なとして爰こゝを明あけ早はやふ立ち、荷人にがにん共に車くるまに乗りければ、

乗り越る其○亀山も心持よく車の音も吉くと鳴る

爰方一里にして、殊の外に早ふ●関の宿に着き打乗。然ルに當宿に名高き地藏尊有り。また関の戸と言し菓子もありけり。

日の本にあまたおはせとその中にこれこそ○関の地藏成らむ

此宿僅の宿にして出抜ケ、少しツ、の山あり。間くを登りて四五漸の茶屋有。向ひに狩野古法眼元信●筆捨やまと言しあり。景別に見事なれば

○往昔の繪師さへ筆を投かれし筆捨やまに筆を取とは

憚りて口繪を止む。淋しき道を抜けて●坂の下と言に着く。また馬を替て、爰よりは●鈴鹿山と言しに懸りぬ。宿外る頃に至りて、右の山禁に、坂上軍将田村丸、鈴鹿鬼神退治の折、一と度拔出給へは千の矢先と化し、觀世音の應讓ありしを祭り給ひし。●清水の觀音巖石を鑿ちて爰に祭りて有る。參詣す。

○放ツ矢の千筋となりて飛散るは是觀音の妙智力かな

爰を超へて青人中の家五七軒も過て、●鈴鹿太神宮の宮居あり。此社前に置て下馬し歩行と成り、馬は背を輕ふして登山させ、彼の唄を思ひ出して、

○昔は馬さへ物を言しとあれば○鈴鹿に曳けて慈悲をくわへん

殊の外に礮礮なり。此辺の杉数十丈に伸び、いと見事也。登り詰るに山上に茶店あり。越へて左りニ至り、田村大明神の社あり。山下り際に至りて大なる石燈籠あり。金毘羅江寄進のよし也。山を下りて●一とおあり。蟹か澤と言し。そのかみ大蟹出て人を取与て飴を以て是を取、今に●水飴また竹の皮に宮餅程ニならへて賣る。

(欄外) ○あめの水もうる也

水飴につゐほたされて横這に出て取られたる蟹か騒きは

少しく下ツて、田村川と言しあり。渡りて檜原あり。山中に田村大明神を祭り有之。宮作り結構ナリ。無程して土山の宿に出る。名物お六漉櫛を賣る。三ヶ月やと言し家号多し。

○土山にちらと見初めし三ヶ月や宵から一ツ召して行かんせ 琴主

爰にてまた繼かへ、左へとて次なる御城下、●加藤左京大夫殿也。無程して●水口宿に着き、

●京やといへる宜敷爰にて亀やま伊勢やりの添手紙持参して、依而付扣置、また爰よふちやふち二詣よ兆ちやうたる一婦あり。年夢物と承り、三日之内なれば早ふ爰ニ着き、髪月代をいたして、暮際ニ湯ニ入。然ルに例の五右衛門、殊ニヲきの強さにはしやきて入りし内に、水のもる事、さるの如し与て、手廻して三人そろくに入湯。然ルに夕餉の支度も調ふまゝ酒を盃し、一杯を傾けんとせしは、三元日の事にて屠蘇とそを出し、また殊の外に取繕ひて、鯛の味噌つて積つ其他珍味珍も出し 存外に酔て

上方ノ言葉○めツそんな御馳走物にうかされて○御免やすく呑酒つゞのしやく

夜四ツ過る頃床ニ入り一と寝入して、早ふ爰を起出し支度取調ふて、馬ニ打乗り少しく行けは川有。●横田川と言し下流ニして左りの山上に庚申有。又岩不動有り。いと淋しき山陰也。右之方に向ツて●三上山と言しあり。笠をふせしことくの山ニして見事也。●遠藤但馬守殿領分也と聞く。世人是を百足山と言し鏢鏢り也。少し小川を越して●万里小路藤房公古跡妙勸寺村と言カに有り。此辺城跡殊ニ多し。又観音寺妙勸寺等其他七十防、往昔は、之處信長公放火ありしよし言傳、今残る處僅四五寺、又此邊の川往来方高し。往来する處は水門の如く成所あり。江州●家の梁川と言し。雪解等の砌一時に落来りしよし也。爰を越れば無レ程●所部石部の宿に継ぎ馬を継ぐ。彼のお半長右衛門の一事などおもひ出し、今●まてまてはままやと言しあり。伊勢の帰りはさそやお半も十五や十六なれば
草臥て○前後も知らず寝る時は堅ひ○石部の枕知らずに
此前、石部与水口の間の宿に、加茂の長明の故跡あり。爰を立ちて間の宿●梅の木と言しに着く。薬宿数多あり。和中散と言し看板出し有也。前に薬師如来を祭り有レ之。

衢ちやうにも●薬師や一句ふ三無和中散

爰を過ぎ、よ程過ぎて漸く草津に出る。此處○竹根鞭の名物、または乳母か餅と言しを賣る●家居あり。見事成家作与て悪口を

○草津とは扱たまらぬと旅人の袖引たれと○乳母か餅賣る

此●草津も許は布薩なるよし、光照ほさつ布薩を受け給ひし時より此名初まりしを、あやまりてくさつといふよし也。爰にて昼の食時をとゝのへ、然るに矢走渡しを馬士の進メに任せて涉り、此処の習にして、賃は馬士より払ふと言し。暫時乗り合の晦に雨氣を催し、少しツ、降り出せとも、余語の海の絶景言し斗りなく筆を起して八景を

矢走帰帆

真帆かけて矢走に着くや帰船

唐崎一ツ松

雨に些淋しく見るや一ツまつ

夕雨に景色の添ふや

三井晚鐘

年の内の春らし眠る三井の鐘

勢田夕照

水かけの扱長橋や勢田の景

栗津晴嵐

偶たま(カ)に洩る日に景色添ふ栗津哉

比良暮雪

照り返す日に雪見るや比良の嶽

消へ残る雪や比良野と夕景色

石山秋月
の楳の尻

芋影の笹笹湖に長くさし入りて麓せの岸に船着を見る

堅田落雁

友しとふ夕部や雁の堅田浦

など、近江の八景を一と処より見しおもひを口と述て、無_レ間大津の川岸に着き、荷物は軽子の持運ひて、あたりの軒下に休らひ置。宿は問屋の近くにとりて●一泊を乞ふ。繁昌東都に續く。此處の名産源五郎ふな、且大津画等は家毎に見へ、古風今に顕われ牛車は江戸に陪す

牛ノ鳴聲も

○最ふ爰に来たかとおもふ登り坂牛の歩行のよりおそくとも

(欄外) ○膳所一体はおものと言しとかや。文字「供御」御膳温飯如_レ此ナリ。をものは栗津の濱をいふとかや。むかし禁裏へ鮮魚を日次に貢せしよしも

○とこほる時もありしなあふみなるおももの濱の蟹の日つきは

御土産に一枚召して行かさんせ大津画は江戸府 志エト下通に出るほど

(欄外) ○義仲寺三井石山ノ話ハ婦リノ記行ニ譲テ出サズ

此處遊女殊に多し。字をお茶様と言しとかや。

膳居へて客待ちうけの●御茶様は一と口物にほふのやけとう

などたわれ事言ふて早ふふせり。翌は伏見てふ夜船にて愈登坂となれば、京一覽の望み起り早ふ荷物は巻荷として先へ廻し、我と三人りは歩行となりて追分てふ二いたり、家毎に

十六盤そろばんを商かふ中に、一里塚前の庄兵衛といふ宜しと言し

京とうへ登り下りのいとさん少女を言し 幼かの玉を算好言カしてくらす○庄兵衛商賣カ

此処右の山上に関大明神と言し有り。蟬丸を祭て彼のこれやこの古事をおもひ出し、また関の清水と言しあり。走り井といふニ走り餅を商ふ。

これやこの讀まれし人は神下はからつ爰神に○逢坂の関

走り井にて

きくしたる手に冷え退かぬ清水かな

従レ其無レ程坂道少し有レ之。右も左りも山々にて景色殊ニよろしく、又た山科の里に近よれば、天智帝の御陵たなほを過ぎて大き成山有レ之。従レ是三条通りと言し。左りの山は東山といふ麓に東山御防彼の

蒲団着て寝たる姿やひかし山

の古事をおもひ出し失礼を不レ頻(カ)

鹿の子またらに茂ける若松

従レ其三条五条四条と渡り所と一覽、祇園并大仏参詣智恩院一見、折節焼失後にて市中淋敷、全くの一見のみにして昼を過れば、伏見街道に出て昼食事をとふへりて、●伏見●針屋庄九郎といふに着く。爰ニて夕食事、船の支度も調ふて乗組、夜舟にて淀川をくたり、彼のくらわんかの商ひ船も出る。

初夜聞て知らぬ里とふ夜船かな蒲団丸めてなふせて透風

などして明ける七ツ過る頃、八軒家てふ●和泉やといふに着船いたし暫時休息、夜明けに及んで髪月代とふいたし、着船の祝酒をとふべりて五軒屋敷へ案内せんとせしか、未だ吉田衆住ひ居られし俟、當時者御門とやらニ仮り住ひ故、爰ニ至りければ、御長屋拜借被ニ 仰付一一寸立寄り、平井氏江罷出 公用の事なれば万事同氏江頼み、部屋へ引取、長途之勞を休めけり。

○浪花ともあれ新らしや今朝の春 旭美

是方吉田衆方之挨拶を待ち、着坂之由は平井氏へ頼み、然ルに翌六日昼後方御 城入いたし、御上屋敷江可ニ罷出一旨被ニ申越一有ニ付、相應及ニ應答一、翌日ニ至り九ツを待ちて支度調ひ、三人連立ちて御上屋敷江出、御内玄関方案内を乞ひ、御廣間御取頭取次を得て、鎗之間てふに通り、吉田様衆類役江逢、一別以来之應接相済、案内にて御小書院と言しに曳て、暫時休息、従レ其代と類役罷出傳達有レ之。御帳記之引合等目錄書にて引合、御吸物御酒御飯等迄出レ之、委曲御用日記ニ讓て略レ之。従レ其日と御上屋敷江罷出、又仮屋敷を取立ツて日と勤

番、然ルに十五日昼時ニ至りて、

殿様御着阪万事一陣ニ讓ル。従^レ其御受取後御城入廿一日也。我々も同日引越役處受取、甲乙番を建て、万事無^レ滞相勤、然ルに明くる寅となりて、正月十一日御有用^レ之罷上候処、別勤を被^ニ仰付^一。江府長詰、家族も召連候哉。御宅従日数ニ而出立之旨、御番頭方達し有^レ之候得共、又江戸へ之御用被^ニ仰付^一、御用済迄之御有餘申立濟寄ニ而、廿三日浪華出立、夕七ツ時を過て、八軒家方乗船、伏見て夜明ヶ朝餉をとふべり。従^レ其竹田街道ニ懸り、大津江四ツ時頃ニ着く。爰ニて昼之支度をととのへ、又三井寺の参詣ニ望あれば歩行ニて登り、所と遥望、奥の院弁慶の引摺り鐘を見て、

注湖に響き巡るや三井のかね

従^レ其参詣果て大津ニ出、銘産大津画をととのへ、また堂を求めて彼の

大津絵の筆のはじめは何仏 はせを

(欄外) 右ノ句意三日閉口題四日トアリ。一書ニ大津ノ乙州か新宅ニ而越年ノ句也。三ヶ日モ過テノ口ひらき殊ニ處ノ物煩ナレは欠(カ)句にし給へり。四日の事なれば何仏と居玉ふ。滑稽感するに絶たり。大津絵は岩佐と言し人始たりと言し

などを思ひ出し

土佐くさといわれて嘯^{ドモ}又兵衛か書き廣めたる大津繪の具に

此宿中を過て粟津原ニ掛らんといそけは、右に義仲寺と有り。彼の朝日將軍の御墓并兼平手植之松等今日残れり。相並んで^注笹蕉翁の牌あり。大坂ニおみ給ひ白骨は此義仲寺ニ納入給ひしよし。また碑名は晋其角の書と言也。爰ニて揚雲雀を見て

名なを高う○粟津か原や揚雲雀 青好

彼の片隅ニ^注笹蕉翁庵居之跡アリ。爰ニての吟のよし。

(欄外) 大坂花屋庵ニ而歎 辞世は旅に病て夢は枯野をかけ廻る はせを

木曾殿と背中合せの寒さかな

折々ニ伊吹を見てや冬籠り

當院ニ、今翁の像を祭ル堂あり。誰人の詠るしれす

時鳥雀に首を上げさせて

庵主に呼へは罷出、其角の短尺又者翁の真蹟等あり。いつも石山幻住庵ちろくくの清水を已(カ)て製すとあり。爰を出て松並方右者粟津、左りは湖水ニて眺望よろしく

はるかせやなに(カ)路のみゆる水の面 青好

従^レ其膳所の城下に出、水に移る城、日に移る余語の湖

凧の尾を白眼^{ニラム}て居るや鱸頭^{シメヂ}

はや彼是昼を過れば、いそき石山ニ参詣せんといそき、連もなう唯獨り漸にして山門に出る。麓に湖水縁ニは茶店、夏月は螢の名所ニて賑ふよし。門内に入れば紅葉の若は也。また桜の

含^{くみ}み今日も開かんとする。即夜境内きらひやか、岩の間方吹出す水、龍頭方出る。爰にて口そゝき石の担^こを上りて庭の結構、けに石山の名頭れけり。鐘楼并鞍楼もあり。又も檀を揚りて端風作りの所あり。是を源氏の間と言し。往昔紫式部五拾四帖を爰にて書頭せし處也と言し。

はや花のゆかり見ゆるや石山寺

従^レ其觀音寺へ拝礼果て裏山へ廻り月見堂へ近寄らんとする。庭上に翁の碑あり。膳所に泊り、暁石山寺に詣て、彼の源氏の間を見て

曙はまたむらさきにほとゝきす　はせを

月見堂一覽湖水爰より見ゆる。麓は人家勢田も見ゆる。沽

はし影のひは湖に長し宵の月　青好

従^レ其下山左りの方に撞鐘あり。是者諸人二つく事を免す。龍宮方揚りしよし。三井の鐘に準し又岩に穴悉く有^レ之。いづれも縁結者一国に有し。

かんおんに縁を誓ひの石山は男に堅^{かた}ひ契り成へし

そこゝこ一覽、此尊体は山城国清水を移し奉るとある。願主は當国北郡浅井備前守長政息女淀殿、秀頼公来世の為とて、御誓願伽らん御建立とあり。堂構の古ひ物淋しく覚ゆ。下山元の道を返りて勢田ニでる。此時八り下りなれば、都の方を返り見て

我かけもは^{ちと}や長橋や勢田の夕

爰方餘程原道を過て●野路村と言しあり。田の中に往昔玉川の跡あり。只萩も名のみ、水も枯れて少く

萩も枯れ水さへ^潤たれて只爰に名にし●近江に野路の●玉川

爰を過て兼平の塚あり。無^レ程して草津に出る。登坂の紀行にあれば爰に略せり。駿河^{するが}洲^洲に入りて府中中程方久能山　御宮江と望生し、相廻りて参詣致し、御宮柱^カ之結構また言しも更なり。絶頂より麓^麓を見るに、十二町と言し上三三防あり。井戸あり。容害の宜しきは二ツとなき土地なるよし。一ツ井を勘介井戸と言也。甲州山本勘介近国之砌る堀見候よし如何成日照りにも水満とたるよし。従^レ其下山、海原を過て三保の片側を通る。興津に出て爰に泊る。また三州ニ出て山中之　御宮と言しに参詣、神組御開運、舞上り八幡宮と言し。御守り等も爰方書る。また藤沢に來りて鳴立沢へ立ち寄り、従^レ其江の嶋参詣の念生して、彼

所江罷出、暮る頃恵ひ寿屋と言しに泊ル。翌日参詣御^{ついで}殿^殿迄不^レ残^レ拜礼相済、七里か濱を過

て腰(カ)越村江来り、切り通しを過て星の井戸一覽、從_レ其案内を得て八幡宮江參詣、雪の下
にて昼食事いたし、また案内を得て五山等江參詣、從_レ其●保土ヶ家宿に泊り、翌六日江戸へ
歸、御用取始末いたし、十三日出立、十五日笠間江案着、家内之歎また言しも更なり。家事
取始末相整へ、四月朔日出府、日比谷御屋敷江着。今之職事無_二油断_一

蕪入の心てうれし寅の春 旭美

元治元甲子年極月廿日_ヲ慶應二丙寅至正月撰_レ之